

猪野先生と国文学科

大野 晋

私はもともと小説を読むことが好きな少年であったから、六十歳まで生きられたら、その先は毎日小説を読んで暮すことにしようなどと、かねて願っていた。それが、研究の区切りをつけかねていた矢先に、インドのことなど出て来てしまったので、小説を読んで日を送ることはできなくなった。

そんな次第だから、私は小説家や、小説の研究者に対しては、心の底で共感と羨望を抱いている。小説の話を聴くのは、その見方に同調できてもできなくても、とても楽しい。もっといろいろ聴きたい、読みたいとも思う。だから猪野先生が見えることに決ったとき、衷心嬉しかった。あれだけの文章を書く方と、同じ学科に勤めることができるとは合わせである。お見えになってからお話を伺うと、先生は永代橋に近い、土洲橋（どしゅうばし）のあたりにお住いだったことがあるらしい。土洲橋と言っても御存知ない方はかりだろうが、私は深川の門前仲町の育ちで、中学時代、日本橋の人形町に親しい友人を持っていた。門前仲町から人形町へ往き来するには永代橋を渡るわけで、その先の土洲橋のそばを通った。だから私はあの辺の物の色と空気とを知っている。猪野先生のお話の場は、手に取るように見える。それは今は失われた下町の一つの景色である。

先生の一高時代の親友、立原道造が先生の近所に住んでいたとのことで、立原の家が木箱を造る家だったというお話を伺うと、あのあたりにはそういう仕事を業としている家がいろいろあったのを私は思い出したりした。そんなことが先生への私の親近感を大きくするのに役立ったかもしれない。

先生は遠慮深い方だと思うけれども、ことがある筋に触れて来ると厳しい鋭い反応が、先生の中で鳴りひびくのを私は側に感じてした。ある筋とは何かと、強いて訊かれたら何と言えはいいだろう。

人は一人一人、それぞれに生まれ育つ間に苦しみや悲しみに揉まれ、それを通じて、願ったり求めたりあるいは祈ったりして生きて行く。その人間の心と動きに対して、いつもしなやかで繊細で謙虚で、しかも鋭い眼を持つこと。それは、徒党を組んだり、おもねったり、あるいは見せかけだけ合わせて本質的にはいい加減なことをしたり、人を踏みじったりすることの正反対のことである。

先生のある筋とは、そんな筋とでもいえようか。先生の傍にいと、風が吹いて来るのを感じる。それはその筋から吹いて来る風なのだったと思う。また、先生のお講義も、その筋の一本通ったお話であったのだと思う。

先生はお酒に強い。談論の発する間に、角瓶半本くらいはすぐあいてしまう。そして先生は戦時中のことを語り、友人を語られた。それは昭和の文学史にみずから加わって生きて来られた人にしか語れないお話だった。私はお酒を仲にして聴き、かつ語ることの喜びと楽しみとを味わわせて頂いた。

先生は学習院に見えて、学習院の学生たちに接するうちに、この学生たちを、いよいよ好きになられたらしい。そして学習院大学の国文学科はいい学科だとお考えになって来られたらしい。学生たちが先生をお慕いして、何度も無理にバス旅行にお連れしたのを、私ははらはらしながら見ていた。しかし先生も心から喜んでそれに参加されているらしいのを、私は有難いことだと感じた。

先生は、もう自分は退いたんだから二度と研究室に行かないとおっしゃってナスビまでは見えるが、研究室には見えない。どうもこれはおかしい。どうかお立ち寄りになってまたお話を聴かせて頂きたい。本当は先生は国文学科に愛着を持っておしまいになったので、わざとそうやって頑張っておいでなのではないか。先生にはそういうことをなさるところがある。

(昭和六十年一月十七日)